

岩田 誠・河村 満(編)

《脳とソーシャル》
「社会活動と脳—行動の原点を探る」

網本 和

(首都大学東京人間健康科学研究科)

ここに2枚のカードがある。その裏には800円とか200円とか金額(−800円から800円まで)が書かれていて、実験参加者は1枚だけめくとそこに書かれた金額が報酬として支払われる(マイナスの場合は報酬から差し引かれる)。この一見単純なゲームは、参加者がカードを引いた後にすぐに「引かなかった」カードを見せられることで、一筋縄ではいかない様相を示し始める。すなわち、自分が引いたカードが200円で、選ばなかったカードが800円だったとしたら、どのように感じるだろうか？

「あっちのカードを引いていれば儲かったはずなのに、しまった！」

たいていの人はこう思うに違いない。あるいは、自分の引いたカードが−200円で、選ばなかったカードが−800円だったとしたら、

「危ないところだった、200円の負けでよかった」

と考えるだろう。この時の脳活動を測定すると、帯状皮質領域の活性化が得られ、その部位はある感情と密接な関係があるという。どんな感情と関係があるのだろうか？ その答えについては本書第Ⅲ章2項の「損得勘定する脳」をご覧ください。ヒントは、現実に株取引などで大きな損失を被った時「痛い損失」と表現されるのは、偶然ではないということである。

冒頭から、このような「どうするオレ的損得勘定」の話題の引用で、何の書籍の紹介かと訝る読者もおられ

るに違いない。岩田誠先生と河村満先生という、神経心理学界における碩学お2人の編著による本書は極めて興味深い話題に富んでいる。本書の目次を見ると、序論、第Ⅰ章：表情認知の脳内機構、第Ⅱ章：意思決定のメカニズム、第Ⅲ章：理性と感情の神経学から構成されており、守備範囲の広さがうかがえる。

例えば社会的認知機能の発達にはアイコンタクトが重要であり、扁桃体の重要性が指摘され、自閉症児では扁桃体の過剰反応によりアイコンタクトの減少が起こり、表情顔学習が障害されることが報告されている(第Ⅰ章1項「社会活動と扁桃体機能」)。また、認知症を伴わないパーキンソン病症例において、「ギャンブル課題」を行うと健常者に比べ不利な選択を好む傾向がみられたという。ギャンブル課題とは何か？、なぜパーキンソン病症例は「不利な選択」を行うのか？、その詳細は第Ⅱ章3項「ギャンブルする脳—パーキンソン病における意思決定過程」をぜひお読みください。

本書は、損得の判断、善悪の判断、集団帰属意識といった、まさに「社会活動」における人間行動を神経心理学的に、実証的なエビデンスに基づいて記述されている。前述したようにその項目と各章のタイトルは実に身近であるが、その内容は先端的な科学論文に裏打ちされたものであり、その文献を再読することでも「原点」に接近できるだろう。本書は「脳とソーシャル」シリーズの第一弾として企画されている。続刊が待たれる。

●A5判 220頁

定価 3,570円(本体3,400円+税5%)

2008年 医学書院・刊